広報 市民リポーターだより ③

「広報市民リポーターだより」今回は、高杉義勝リポーターが「人の心」について、佐藤康恵リポーターが「農業問題」をそれぞれ取材しました。

郷土を愛する心

リポーター　高杉義勝（繋沢）

世の中が非常に進歩しましたが、その反面、昔とは違った問題が山積みされているように思います。

これらの問題を解決し、さらに地域の活性化を図るためには、まず、郷土愛の豊かな心を養わなければならないと考え、花岡の伊藤元雄宮司さん宅を訪ねてみました。同氏は、去る昭和五十五年に九十二歳の高齢で亡くなりましたが、最後まで郷土を歩きまわり、私たちに郷土愛の道を説いてくれた方でした。同氏の二男次郎さん（現神官）に話を伺いながら、同氏の心に触れたいと思います。

敬神愛人の心

静かな夏の風が、さっと涼しく入ってくる和風の住まいに「敬神愛人」の軸が掛けられていました。先代の宮司さんいわく。「これは漢文で読んでも国文で読んでも意味が同じですよ。神を敬い人を愛するということです。神を敬うということは、清々しき心と懐しさをもってものごとに感謝し、また他人の話にも耳を傾けるということです。人を愛するということは、わが子を愛することも、郷土や国を愛することも同じ愛なのです。愛することによって、世の中を良くすることが本当の愛なのです。」と教えてくれました。

節約の心

私たちに手紙や会議の通知の封筒をよこすには、古い封筒を裏返ししたものでした。こんな封筒を受けとるたびに節約の心が甦り、頭がさがる思いでした。このことが孫の美智子宮司さんにも受け継がれております。

「書類を綴るのにしても、今はホチキスで綴りますが、父は細い紙を指先でよって綴っていました。」と次郎さんが懐しそうに話してくれました。

日本人の心

「日本人が日本人らしい生き方をするには、遠い遠い先祖から受け継いで来ている精神を素直な心で受けとめ、そして実行実践することです。外国の良いところをどんどん受け入れて、すばらしい文化、日本を築くことが大切なことは申すまでもありません。それだけに、日本人が日本人の心を失っては、真の日本文化の発展は望み得ません」

これは、同氏の書の一節です。

やはりこの書も包み紙を裏返ししたものを表紙にして、自筆で「日本人の心」と記し、私たちに残してくれました。今なお同氏の姿が偲ばれます。

これから地域の明日を考えるとき、こうした郷土の先人の教えを土台にし、より良い生活を切り開いて行きたいものです。

▶伊藤次男さんと高杉義勝リポーター（右）

明日の農業を考えて

リポーター　佐藤康恵（川口）

六月はカラ梅雨でしたが、七月に入ると乾燥した田畑に恵みの雨をもたらしました。

私は七月十日、中山地区の農家で果樹と稲作の復合経営をしている糸屋博一さんを訪ね、雨の中ナシの袋かけ作業にお忙しのところお話を伺いました。

米の生産調整の拡大、生産者米価の引き下げと、農業経営は非常に厳しい環境にあります。こんな中で経営の復合化を図り、転作田で栽培するソバと併せて、「中山ナシ」、「中山ソバ」を直売するなど、多角的な経営でより安定した農業を目指す姿勢はこれからの農業の一つの方向を感じさせるものでした。

しかし、これからの課題も多いようです。経営規模の拡大、防除の問題、果樹の安定した生産出荷の問題、農産物加工や観光農園化についての問題などは個人で対処するには困難だと話していました。また、現在の木は老木化が進み更新の時期を迎えているそうですが若木を植えてから通常の収穫ができるようになるまでには約十年もかかるということです。消費者のニーズに応えて品種を更新することができればもっと中山ナシが伸びていけますが、それも米の生産調整が更に拡大されたり、米価が上がらなかったりという状況になれば、労力的にも収益の面からも難しくなると話されました。

今年、米の生産調整が大幅に拡大されたことで、市内農家の総減収額はおよそ五億円になるともいわれています。これに追い討ちをかけるような米価引下げの決定は農家にとってまさに死活問題です。これで本当に中核的な担い手農家を育成し、自立できる農業を確立していくことができるのでしょうか。

私が訪ねた農家をはじめ、地域の中核となって明日の農業を切り開こうと、稲作はもとより畜産やハウス栽培など各分野で懸命に努力されている農家は少なくありません。しかし、まだそれは〝点〟として散在するもので、今後これら中核農家の経営を〝面〟的に拡大し、農家が農協や行政と共に英知を結集させ、大館一円の農産地の適地適産化を図ることによって産地間競争で勝ち抜いていける農業の確立を急がなくてはならないと思います。

市の活性化や商工業の発展も農家経済の向上なしには成り得ないし、転作田については、農家がもっと有効的に活用しなければ、稲作との収益差を補うことは不可能に近いと思います。

米の輸入自由化を阻止し、米の自給を堅持しても、今や「豊作」は生産者米価の再引き下げを懸念させ、生産調整の拡大を助長しています。こんな形で農業が崩壊しては、どうにもならないのです。

恒例の鳳鳴高校の仮装行列にも「農業は国民の生命、米の輸入化絶対反対」のプラカードが小雨降る中に見えました。農民に仮装した学生たちの足どりが重く感じられたのは天候のせいだったのでしょうか。これからの農業の厳しさを暗示するかのようでもありました。

▲糸屋博一さんから話を聞いている佐藤康恵リポーター

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。